# 「内なる自然」ミニシンポジウム

# 報告集

~「内なる自然」から 人と社会の在り方を考える~

平成 27 年 1 月 14 日(水) 13:00~17:00 京(みやこ)エコロジーセンター(一階シアター)



主 催 認定NPO法人自然環境復元協会 〒169-0075 東京都新宿区高田馬場 1-3-13-301 TEL 03-5272-0254 FAX 03-5272-0278

共 催 日本環境教育学会関西支部 日本的自然観実践研究会

協 カ 子どもと自然学会 環境再生医の会・関西

# ■プログラム【日程】

開 場 13:00

開会行事 13:15~13:25 挨拶と趣旨説明

講 演 13:30~14:30 講演 1 「自然はひとつ」 中村桂子氏 (JT 生命誌研究館館長)

> 14:40~15:40 講演 2 「内外一如の日本的 自然観に学ぶ」 菅井啓之氏(京都光華女子大学教授)

> > (休憩)

質疑応答 15:50~16:50 コーディネーター 村上宣雄氏 (自然環境復元協会理事・龍谷大学非常勤講師)

閉 会 17:00





# あいさつ

#### 認定NPO法人自然環境復元協会 理事長 加藤正之



今日は厚い雲でとても寒い一日ですが、皆さんにはお運びいただき、まことに有難うございます。私はNPO法人自然環境復元協会理事長の加藤と申します。 お手元の講演要旨集最後のページに、「正しい知識とみんなの力で自然はよみがえる。私たちは自然を治すお医者さんです」とありますように、本協会は自然環境を保全したり治したりする、

自然のお医者さんの役割を果たしております。現在全国には、本協会で資格認定を行った環境再生医が3800人おり、各地で地元の環境再生の活動を行っています。

それとともに環境学習活動も推進し、さらに農山村の環境保全や農業支援のため都市の若者を地方に送り出す事業を中心にして活動しています。農山村は生物多様性が豊かで、かつ歴史に育まれた文化もあるので、これらを大切にしながら自然環境を再生することを目的として活動している団体です。

現在はNPO法人となっていますが、発足当初は「自然環境復元研究会」という名称の任意団体として1989年から活動を始めました。その当時の日本は経済発展の時代で、内陸・沿岸を問わず自然環境の破壊、改変が行われる状況でしたが、特に成長期の子供たちから自然が奪われることに問題意識を持った学者や研究者が10人余り集まって活動を始めました。それから26年が経った現在、私が理事長を任されています。

私自身の活動を少しふり返りますと、初代理事長であった杉山惠一先生、当時静岡大学教育学部生物生態学の教授をされていましたが、この方のご指導によって、静岡県三島市内の汚れた農業用水路の再生活動に参加しました。残念なことに杉山先生は2年前に他界されましたが、私たちはその志を継いで活動を発展させ、また日本の自然を人々の暮らしにとって、その豊かさと恵みを後世に伝えていくという信念で活動しています。

なお、本シンポジウムの開催の趣旨をご理解下さいまして、どうか最後まで お付き合いをいただき有意義なシンポジウムになりますよう御協力よろしく御 願い致します。

> 平成27年1月14日 認定NPO法人自然環境復元協会 理事長 加藤正之

# 開催趣旨

## 「内なる自然」ミニシンポジウムの開催にあたって

平成26年度、NPO法人自然環境復元協会自然体験学習事業の一環として、環境再生医の会・関西では「内なる自然」シンポジウムを企画してきましたが、このたび日本環境教育学会関西支部、日本的自然観実践研究会との共催と、子どもと自然学会の協力を得て、関西において共同で開催することになりました。戦後70年、高度経済成長期とその後の成熟期を経た現代社会は、次の時代に向けての模索が始まっています。それは今日まで世の中を風靡してきた、物質中心の経済を優先する価値観から、血の通った人の心やいのちを見直して大切にしようとする歩みです。そのためには身近な問題として、「人は生き物であり、自然の一員でもある」という当たり前のことを、もういちどじっくりと考えてみる必要があると思われます。

自然環境復元協会の前理事長故杉山惠一氏は、「自然環境の復元は自明のこと」とするこれまでの意識を改め、「自然とは何か」「人と自然との関係はいかに」という課題を、原点に返って取り組むべきであると考え、その足係りとして、「内なる自然」という仮説と概念をキーワードに検討することを提言されてきました。その後協会内では、関係者が何回か集まり多方面にわたる論議を続けてきました。そしてこの問題提起に応えてそれを確かめることが、このミニシンポジウム開催のきっかけであり目的でもあります。

人類文明の転回点にあると言われている現在、人と自然にかかわる如何なる 分野においても、主体たる人間の立ち位置について見直すことは、共通の課題 であると言えます。このたびこの道についての研究と啓発に造詣の深い二人の 先生方を招いて、「内なる自然とは如何にあるか」についてご講話を頂くことに なりました。この機会に私たちはすすんで身の周りの環境、つまり「外なる自 然」との関わり方についても見直しを行い、「内なる自然」への思いを共有する ことができれば幸いです。

# 当日配布資料

# 講演 1

# 自然はひとつ

# ─ "ヒト"と"人"を生かす未来を ──

中村桂子(JT生命誌研究館館長)

#### 1. ヒトと人

私たち生物研究者が人間を考える時には、その中にいつも"ヒト"と"人" という二重の存在がある。"人"は通常の社会生活を送る存在であり、普通の文 脈で人間と呼ばれるものだが"ヒト"は地球上に暮らす多種多様な生きものの 一つを指す。もう少し詳しく見て行こう。

地球上には170万種もの多様な種がある。近年、熱帯雨林、深海、地中などの調査が進み、種は数千万にのぼると考えられるようになった。一方、あらゆる生きものは DNA をもつ細胞からできている。こうして多様でありながら普遍性をもつ生物の中にヒトという生きものも入っているのである。

近年、細胞内にある DNA のすべて、つまりゲノムの解析が進み、さまざまな生物の DNA の比較が可能になった。そこで、私たちの体の構造の基本である体節づくりに関わる遺伝子は、魚はもちろん、ショウジョウバエなどの昆虫とも共通であるということがわかった。実はここではたらく遺伝子はヒトデにも存在する。つまり、生きものの体づくりの基本は大昔に簡単な動物が生れた時にでき上り、すべての生きものがその方法を用いているのである。それぞれの生きもので少しずつ変化させ自分バージョンを作りながら。このような事実を辿ると、すべての生物が38億年前に海中にいたとされる祖先細胞に到る。私たちヒトは38億年という生命の歴史を他の生きものと共有しているのである。

「人間は生きものであり、自然の一部である」。あたりまえすぎるほどあたりまえのこの言葉の意味は、人間が38億年もの長い歴史を他の生きものたちと共有しているということなのである。もちろん、ヒトは他の動物にない特徴をもつ。二足歩行により大きな脳と自由な手をもち言葉を持つようになったこと

である。それによって文化・文明を生み出し、今やみごとな科学技術文明社会 をつくった。ただそれが生きものとしてのヒトのことを考えに入れているだろ うかということが気になる。

#### 2. ひとつの自然に向き合う

生きものに不可欠なのは汚染されない水を基本とする自然環境である。そこで安全で美味しい食べものを作り、健康に生きることが生活の基本である。そのためには農林水産業を大切にし、自分たちで納得のいく食べものづくりをすることだ。常に自然と向き合い、他の生きものに対して勝手な振る舞いをしないことも大切である。

私たちは、洋服を着て自動車に乗り、コンピュータを活用する"人"である。これを否定することはない。しかし、38億年という長い歴史を持つ"ヒト"という生きものでもあるのだ。そして、この生きものであることを無視して経済や科学技術を進めることは、本当の意味での豊かさや幸せをもたらさないことは明らかである。

人としては常に自然を外のものとして考える。しかし、ヒトは自然の一部であり、自分の中に自然をもつ。内なる自然と呼んでよかろう。こう考えると「自然はひとつ」という捉え方の重要性が浮び上る。内なる自然を無視すると人の体も心も壊れる。ここでいう心とは時間と関係と言ってよかろう。東日本大震災を思い起こしながら内なる自然の問題を考えてみたい。

#### 略歷

氏 名 **中村 桂子 (なかむら けいこ)** 

現 職 JT生命誌研究館館長

生年月日 昭和11年1月1日 東京都出身

勤務先 JT生命誌研究館

住所: 〒569-1125 大阪府高槻市紫町1-1

TEL: 072-681-9750 (代)



昭和34年3月 東京大学理学部化学科卒業

昭和39年3月 東京大学大学院生物化学専攻博士課程修了 (理学博士)

職歷

昭和39年4月 国立予防衛生研究所研究員

昭和46年5月 三菱化成生命科学研究所社会生命科学研究室長

昭和56年4月 三菱化成生命科学研究所人間自然研究部長

平成元年 4月 早稲田大学人間科学部教授

平成5年 4月 | 丁生命誌研究館副館長

平成7年 5月 東京大学先端科学技術研究センター客員教授

平成8年 4月 大阪大学連携大学院教授

平成14年4月 JT生命誌研究館館長

受賞歴

平成 5 年 第47回每日出版文化賞

「自己創出する生命」(哲学書房)

平成 8 年 第12回日刊工業新聞 技術・科学図書文化賞優秀賞

「ゲノムを読む」(紀伊国屋書店)

平成12年 第8回松下幸之助花の万博記念賞

第15回ダイヤモンドレディ賞

平成14年 オメガ・アワード2002

第10回大阪府女性基金プリムラ大賞

平成19年 第45回大阪文化賞

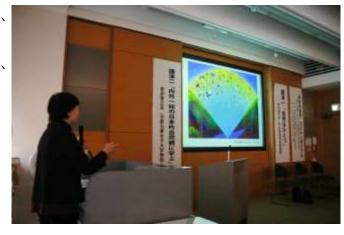
平成24年 アカデミア賞文化部門

# 講演1記録

「内なる自然」という難題について、「自然はひとつ」という題でお話をする。現代社会は科学技術と金融市場原理によって、人間性を豊かにすることを求めている。ただ生物学者として、人間はヒトという生きものであり、自然の一部であるということを指摘したい。先進した現代社会の発展は、外の自然を破壊し地球環境問題を引きおこしている。私たち自身も自然の一部であり、その内なる自然も同じように破壊される。内なる自然とは身体と心であり、心は時間と関係である。これを断ち切り、内の自然を破壊しているのが現代である。それを明確に見せつけたのが、東日本大震災であった。自然は素晴らしいが恐ろしくもあり、しばしば地震や津波を引きおこすが、それに加えてこの度は、近代科学の象徴でもある原子力発電所の事故があったため、地域の人々の生活がより大きく破壊された。この事実は近代文明の検討を求めている。最も基本的なことが、現在の金融市場経済と科学技術の組み合わせでは無視されていることを考えなければならない。

人は生きもの、人間は自然の一部であることは、縄文人や子供でも分かる当たり前のことだが、私たちは現在の学問により、経済や科学技術と関連して考えることができる。この課題に対して、私が生物学の立場から考え出した知恵が生命誌である。生命誌を目でわかるように描いたのが生命誌絵巻である。この図は生命の全体像をひとつの扇形に表しており、生命の起源を扇形の要とし

てそこから扇形の縁までの間に、 バクテリアからヒトに至るまで 海の中から段階を追って上陸し、 多様な生きものに分かれた姿が 配置されている。ヒトも勿論そ の中にいる。扇形の縁までは、 生命起源から38億年のいのち の歴史を表現している。ここに 示された数千万種ともいわれる 多様な生物は、すべてDNAの



入った細胞を持つものであり、普遍性を持つ一つの自然である。これが生命誌の第一の基本である。基本の第二は、現在の生きものはすべて38億年の時間の入った存在ということである。コンピュータを組むのに2ヶ月とはかからないが、小さな蟻一匹が生まれるには38億年もの時間がかかっているということである。生きものの時間に高等下等の区別はない。この基本はヒトも勿論38億年の時間を持つ存在として、この扇の中に入るということである。現代社会

では人間はこの扇の外、しかも上の方から自然を見ていると考えて動いている。 原発事故を想定外と言い、「地球にやさしく」という言葉を用いるのはその感覚 だろう。何十億年の地球の時間の中にいるという自覚を持つことが大切である。 つぎに「私」という個について考えよう。私たちは、人間として自然環境や 社会環境の中に生活している。しかしその「私」はまた生命38億年の歴史を 持った祖先から生まれた生きものとしての存在でもある。つまりヒトとしての 「私」が生まれ、育ち、生活してやがて老い、死んでいくプロセスは、人間と しての一生と重なり合うものである。ヒトとして生まれた人間のこのような生 涯のあり方を、ライフステージと呼んで提案した。しかし経済成長至上の当時 (1970年代)のわが国は成人男子中心の社会であったため、生きものの生 き方として、人間の一生を大事に生きていくことに対する関心は薄かった。そ こで、一生を考え、すべての時が重要であるという考え方の社会を提案したの である。哲学者の今道友信先生は、人間の生き方は時間的存在であるから、時 間を無視すれば人間は機械化してしまうとおっしゃった。自然は材料、生命は 機能、意識は反応と見なされ、言語は記号、思考は工夫、概念は対象となって しまう。何とつまらない世界だろうということで、私も同感である。「生きてい る」を見つめ「生きる」を考えなければ、生命は何かと問うても生命尊重をと 唱えることだけに終わってしまう。

生きものが38億年にわたって生きていることを見つめ、多様でありながら 共通性のあることを知るという研究をしながら、これまで述べた社会への道を 考えている一つの研究を紹介しよう。左右相称動物の祖先から分かれ、節足動 物と脊索動物へと進化する道を知るため、節足動物で比較的早く枝分かれした オオヒメグモに注目し、その体節のでき方を考察した。クモは分類上節足動物 のショウジョウバエと脊索動物に属するヒトとの中間に位置する動物であるが、 卵は卵塊を形成して孵化が一斉に行われるために、研究に適している。そこで 体節の形成過程を見ると、尾部、胸部、頭部のそれぞれのでき方は、その部位 によって異なっている。しかも尾部は振動しながら形成され、それはヒトと同 じ体節の作り方である。これに対して胸部は一度に形成され、それはショウジ ョウバエと共通している。また頭部はまず一節できてそれが二節に分かれるも ので、クモだけの作り方である。このような小さなクモの発生段階での体節形 成の過程をよく観察すれば、大昔の共通祖先が歩んだ道筋を見ることができる。 それは38億年かけて生き物が進化した過程で多様化していった証であり、し かも人間だけが特別な存在でないことを物語っている。「生きている」を見つめ るとは、こういうことである。

人間も他の生物も区別することなく、「生きている」を見つめ「生きる」を考えるものの見方、考え方として生命誌を提唱した。そこで重要なのが世界観で

ある。

大森荘蔵先生は、著書"知の構築とその呪縛"(ちくま学芸文庫)の中で次のよ



うに述べられている。(文末 註1、註2) その通りである。現代文明の中に生きている以上、それを否定しても何の意味もない。それを超えることこそ重要なのである。大森先生は「科学は自然を死物化する」と述べられている。私は生命誌でそこに時間と関係を入れて考えた。では哲学者としてどうこの問題に関わればよいのか。大森先生は同著書の中で、略画的世界観と密画的世界観という見方を提唱されて、重ね描きに言及されている。密画

的世界観とは人間や生物をDNAやナノで見ていく、極めて厳密な世界の見方 である。しかし、例えば美しく咲く花の素晴らしさは遺伝子だけでは見えてこ ない。咲いている花そのものを総体的にとらえるわけで、これが略画的世界観 である。科学は前者が進歩した見方、後者は遅れているとして区別する。しか し両方の側面を持っている生身の人間にとっては、そのどちらをも大切なので ある。生物学者である私にも、子どもの母としてまた家庭の主婦としての生き 方が日常生活の中にある。だから"科学者が人間であること"という本を書い た。一人の人間がこのような両面性を持ち、重ね描きをしていけば、機械的世 界観(生命科学)から生命論的世界観(生命誌)へと入っていく架け橋となる。 自然に対して科学は外にいる、つまり客観的であるが、生命誌は中にある主客 合一であって、内なる自然を見ている。一方生活という視点では、前者は技術 的、後者は芸術的な世界観である。実はこのような社会では食べ物や健康、住 まい、心と知、環境などが重要になり、産業としては、農水産業、医療、林業、 教育などであるが、現代社会はここに多くの問題を抱えている。「生きている」 を見つめ「生きる」を考えるためには、重ね描きをすることがとても重要であ る。

生命を基本的に置く社会への具体的な実践事例として、喜多方市小学校の農業科(特区)の実践を挙げ、そこで子どもたちが書いた作文の一端を紹介する。畑で枝豆づくりを経験した三年生の子どもであるが、枝豆の植物に対して「大きくなれよ」と話しかけた。現発事故で出荷停止となった話を聞いた五年生の子どもは、「喜多方市のお米は安全でおいしいです。福島県へ来る人が増えるといいな」と、米作りを体験して思ったと書いている。社会科の授業ではピンとこないが、自らの体験があればこんなにも伝わるというよい例である。この小学校ではこのような農体験によって、子どもたちは自ら表現したり、コミュニケーションをとる能力を身に着けていった。これが本当の生きる力であると思う。生命そして技術や経済が権力によって牛耳られている現代社会に、逆らう

ことのできるのはこのような生きる力であり、このような子どもの作る未来には新しい技術や経済の発展することを願っている。

最後に「虫愛づる姫」の物語をして終わります。千年も昔、紫式部の頃に京都に住んでいた大納言の姫君の話である。当時の風習であった眉剃りやお歯黒もしない十三歳の姫君は、大の虫好きの小さなナチュラリストであった。千年もの昔、勿論DNAも知らない少女の自然を愛づる心を持った生き方に、本当の内なる自然の意味を教えられる。このような歴史があることを誇りに思い、大切にしたい。

#### 註1:世界観について

元来世界観というものは単なる学問的認識ではない。学問的認識を含んでの 全生活的なものである。自然をどう見るかにとどまらず、人間生活をどう見る か、そしてどう生活し行動するかを含んでワンセットになっているものである。 そこには宗教、道徳、政治、商売、性、教育、司法、儀式、習俗、スポーツと、 人間生活のあらゆる面が含まれている。

#### 註2: 近代的世界観について

この全生活的世界観に根本的な改革をもたらしたのが近代科学であったと思われるのである。近代科学によって、特に人間観と自然観がガラリと変わり、それが人間生活のすべてに及んだのである。・・・現代文明の改革を言々するときにわれわれが感じているのは、その最も長期的な波ではないかと私には思われる。

・・・こういう最も目の粗い縮尺で見るならば、東洋と西洋という対立は消えて しまう。・・・洋の東西を問わずに、近代科学以前の世界観と近代科学に基礎づけ られている近代的世界観とのコントラストである。

# 当日配布資料

# 講演2

# 「内外一如の日本的自然観に学ぶ」

#### 菅井啓之 (京都光華女子大学教授)

- ○「自然神仏」という日本的自然観から学ぶべきことは
  - 自然と一如になって行動 →「畏敬の念」 → 「恵みへの感謝」
  - → 知足(むさぼらない) → 生きて行く姿勢としての謙虚さ
- 1、森羅万象の働きそのものが神(山の神、川の神、海の神、田の神、・・・)
  - ・私自身のいのちそのものも神である。(神道の心)
- 2、山川草木国土悉皆成仏 (本覚思想・仏教)
  - ・「やまこれやまというにあらず、山これやまというなり」(正法眼蔵:山水経)
- 3、「自然とは何か」・・「おのずから」という働き
  - ・「自然≠Nature」 全てはこの認識から始まる
  - ・分ける前は自然は一つ

「外なる自然」と「内なる自然」というのは本来一つのものをあえて分けていう言葉

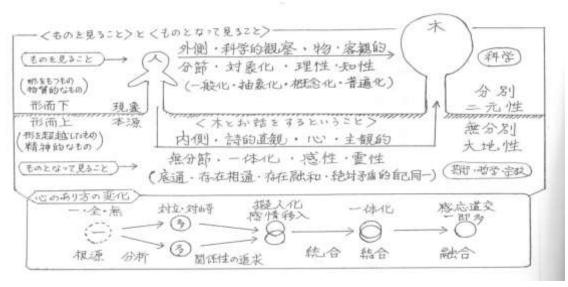
- 4、「和敬清寂愛」それが「自然体」
  - ・親鸞の晩年の境涯「自然法爾」
  - ・老子の「無為自然」

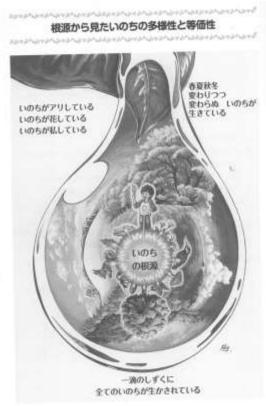
#### <提案>

- 1、自然復元は、外なる自然(形)だけではなく、 内なる自然(心)の復元が同時に必要である。
  - ・形を整えることで心が整い、心を整えることで形が整う。
  - ・環境の復元の前に、人の心の復元をどう図るべきか。
  - ・自然を鏡として自己の内面の自然観を見直し、健全化する方法を極める。
  - ・感受性、鑑賞力、観察力、洞察力のトレーニング ⇒自然を読む力
  - 2、復元の「元」の字が何を示しているのかを探求することが必要。
    - ・「元」に戻す、復活させるということではあるが、その「元」とは何か。 自然復元の「自然」とは何かの思索が重要。

#### ・庭の心を学ぶ

日本的自然観の具現化されたものとしての日本庭園に学ぶ自然の縮図、形小相大(盆栽の理念)と同じ





#### 1. 一滴のしずくに全てのいのちが生かされている

いのもの故である水は、天からの一緒のしずくの難まりであり、やがてそれ らが大海となる。全てのいのちは水を添として水でつながっており、一緒のし すくが、全てのいのちを包み込んでいるのである。つまり。無小の中に極大を 含んでいるというわけである。一流のしずくの費きをしみじみと味わい、いの ちの根箱を見つめたいものである。

#### 「いのちがアリしている」「いのちが花している」「いのちが 私している」

いのちの本題(大生命)が、側々関々の小さないのちとして現れることによって、全体の中でそれぞれ独自の投類を果たしている。だから、アリにいのちが宿っているのではなくて、「いのちがアリしている(アリとして現れている)」のである。同じく、いのちが往として頭現していることを、「いのちが花している」という表現ができる。つまり、「いのちが私している」のである。この世界は、いのちの多様な現れ方によって成り立っているのである。

#### 3. 春夏秋冬、変わりつつ 変わらぬいのちが生きている

四季折々の変化は目に見える。多様ないのちも属々と千変万化している。その変化する要に目を奪われると、この世界は常住なものはなく移ちうものばかりて、無常慈のみが驱る。しかし、その変化の奥に深く目を向け、移り変わるものの背後を刺療し、損光妖管に備すれば、変化しつつも変化しない言葉のいのちが見えてくる。

「吉楠の糸の中なる春の甘に つねばるかなる形をぞみる」(十年間)

\*お、まれ下がった様の所依に若草筋のまらかい芽が切っている。そのいのちの自然の悪には、 不安で食行るる年金の世間の客を見ることができる。

「美しい心を育む自然観察」: 菅井啓之・後藤紗貴、文渓堂、2004。より

# 日本的自然観の根幹は おのずから」

から) 然 (しかる)」という意「じねん」とは「自 (おのず 敬してきた伝統が日本的な自 きに対する尊厳さそのものを神 味で、「おのずから」という働 を指す言葉である。 りは根源的な生命力(いのち) 羅万象の働きそのもの、 「自然」は「じねん」と読まれ、 絶対的な働きとして つま

「おのずから」を みずから」に生きることを 「自然体」という

と、それがその人の「生き方」日々の行動が積算されてくる 的成長が「自然体」の生き方を 変革していく。このような螺旋 は「観」をより高次なものへと を変え、「行」は「道」を築き、「道 を変革していく。「観」は「行」 その生き方の集積は世界の見方 =「道」となる。そしてさらに な動きを創造するからである。 ものの見方(観)がその人の行 動(行)を規定すると共に新た は必ず「行」となる。 を「観」と表現すれば、「観 Ė 然の見方 つまり、

> 和 敬 清寂 日本的自然観の柱となる の五要素が

切にしてきた。自然と一体にな ることであった。 ることが自己の生命を調和させ ととらえ、人々は「自然と和す つまり「自然との一体感」を大 の姿そのもの「大調和の実体」 日本人は昔から自然をどのよ

の念が湧出してきた。さらには的な存在であり、おのずと畏敬 ことは、 人智をはるかに超えた壮大な力 自然の絶大な働きを畏れ敬う 対して人間はひれ伏すのみ。 自然に対する謙虚さを

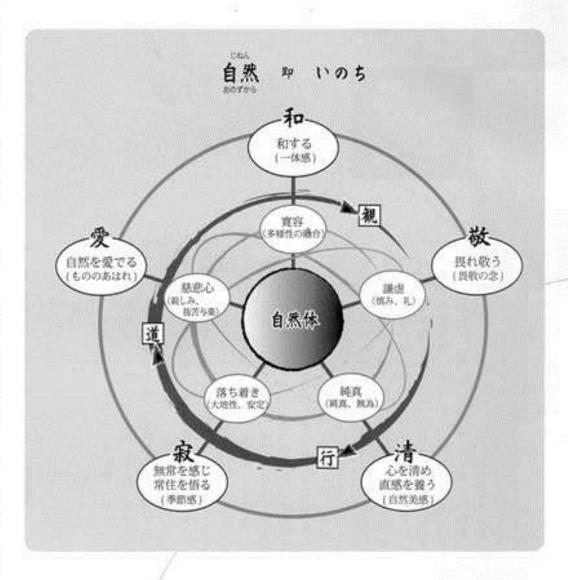
> だちの心を浄化してくれる。 のずと直観が冴えわたり自然の心が洗われ清まってくると、お るものである。自然美によってた境地にして初めて生まれてく 偏見やかたくなな自我が脱落しじる感覚や心(自然美感)は、 然のあらゆるものを美しいと感 本質的な働きが私たちの働きと 生きてくることとなる。 然はどこまでも美しく、

が日本人である。無常の背後に不変なるものを見抜いてきたののものであるが、実はその奥にわば「季節感」は「無常観」そ 「おのずからに我が身を全托し「おのずからに我が身を全托し」 のものである。 常住を読み直観する心とは、 できたのが日本文化である。 できたのが日本文化である。言いて味わい慈しむことを楽しん 寂」「寂静」=「 ありようを、 のである。その無常なる自然 四季の変化にお 悟り」の境地そ

13

自然は無限に変化しつつある

# 然観とそれに基づく日本人の生き方



# 自然体という生き方

29

日本的自然観を通して私たちでも自然の在り方に沿った、自然と一体化した生き方は、どこまでも自然の在り方に沿った、自然と一体化した生き方である。然と一体化した生き方である。然と一体化した生き方である。全に体現していくことである。全に体現していくことである。全てのものに対していつも、寛容で(和)、慎み深く(敬)純心で(和)、慎み深く(敬)純心で(和)、慎み深く(敬)純心を方な行動、をお書きがあった。

#### 略歷

#### 氏名 菅井啓之 (すがい ひろゆき)

昭和28年(1953年)大阪府生まれ。 大阪教育大学小学校課程理学科卒 大阪市内の公立小学校教諭、 大阪教育大学附属池田小学校教諭、 ノートルダム学院小学校教諭を経て、平成17年より 京都ノートルダム女子大学心理学部教授、 平成26年から京都光華女子大学教授 専門は自然教育、理科教育、環境教育



北千里自然観察会(昭和60年より平成13年まで毎月1回実施) 服部緑地自然観察会(平成14年より現在まで、毎月1回実施) 緑懇会(森林文化を学ぶ自然観察会、平成5年より現在まで毎月1回実施) NPO法人シニア自然大学校講師など、自然観察を主とする自然教育活動を 定期的に行っている。

#### 著書

「ものの見方を育む自然観察入門」菅井啓之、文渓堂、2004年 「美しい心を育む自然観察」菅井啓之・後藤紗貴、文溪堂、2014年

# 講演2 記録

これまでに私は小学校、大学の教員として、理科教育を中心に理科の教科書づくりにかかわってきたので、その立場から話をする。またフィールドでは自由に子どもたちや親たちと自然にふれ合う自然観察会を、長年にわたってやってきた。外なる自然、内なる自然の視点は、これまでにやってきた理科教育や自然観察を通して改革してきた課題と、重なるところが多くある。さらに環境教育学会では、理科専科で環境教育を推進してきた。この時の話題であるが、小学校5・6年で教えた卒業生の同窓会で、閉会後にゴミが散乱したままの会場を見て、この2年間やってきた環境教育が、この子供たちの行動には何も繋がっていなかったことを知って、愕然とした。そしてその反省から、環境教育がよく生きることに繋がらねばならないという視点が、一番大きな課題であることに気付いた。

平成13年6月8日に起きた、大阪大学付属小学校での学童殺傷事件(学童8名が教室で暴漢に襲われて死亡した)に遭遇した。その後、事件によって喪失感を持った子どもたちの心を癒して、どうすれば生きる力を呼びもどすことができるかについて考えた。そしてそのためには、子どもたちを自然という根源的なものにふれさせるしかないと思い、全員教室外に連れ出して授業を行った。其処で子どもたちは、鳴く虫や色づいた落ち葉、吹く風の音を見聞きし、傷ついた心は速やかに回復していった。その時は、自然とのふれ合いが人間の本質にかかわるということを強く実感した。

自然観察会を長年にわたって実践してきたが、その方法とは物覚えばかりの 観察会であった。子どもや親たちも、もっぱらフィールドノートに植物名など 聞いたことを書き込むだけで、何も見ていない。本当は自然をよく見ることに よって自分がどう生きたらよいかに気づき、自然からエネルギーを貰って自己 変革に繋がることが大切である。まず目の前の生きものや自然を、あるがまま によく見ることであり、知識はその後で学ぶこともできる。このようなとらえ 方を確実にしておかないと、あとで自然を科学で分析的に学んでも、事実が薄 れて見えなくなってしまう。

いま1本の木のモデルを考えてみよう。木には枝葉や幹や根があって、それらが一つのパイプのようになっている。その中を水や養分が全体的に流転することによって、木は生きているのである。これが自然の総合的なあり方であるが、小学校に総合的な学習の時間があっても、教員に対するトレーニングができていないため、そのようなとらえ方を教えることが現状では難しい。しかし生きるということを学ばせるためには、このように総合的なもののとらえ方が行動へと繋がり、子どもたちの生きる力に結びついていくことが大切である。



しかし私たちの過去を振り返って も、理科では科学的なものの見方し か学んでこなかった。それを超える ためには、昔の人たちが、暮らしの 中でいかに自然とふれ合って生き ていたか、その自然のとらえ方を現 在の私たちが受け止めて、日々の生 き方に返していく必要がある。

鎌倉時代に曹洞宗を開いた道元

は正法眼蔵という書物を書き、その中で「回互転換」ということを言っている。 それは、物事はすべて互いに行き来しつつ、やがて一つに結びついていくとい う意味である。科学だけで分析的にものを見ていくと、物事の関係性が見え難 くなる一方、仮に関係性が分かっても単純でないときは複雑系となってより分 かり難くなる。そこで、同時に直観を働かせねばならない。観察の観とは直観 の観、察は洞察である。見知ではなくその奥にあるものと響き合うことである。 このことを「感応道交」と言うが、それによって外の世界と内の世界も繋がり、 これが一如である。「松のことは松に習え」「竹のことは竹に習え」と言われる が、このような感応道交の世界があるのに、私たちはつい科学の知識を使って 分かった気になってしまう。それを否定するわけではないがその前に、「自然は 先生」だから、直接に自然から学ぶという態度や生き方を養わないと、どんな にそこの自然が美しくとも長続きさせていくことができない。外と内を一如と することが、本来日本人が求めてきた自然の見方である。私は子どもの時から 貝殻が大好きで、集めた貝殻の美しさに魅了されているが、残念なことに貝殻 は死物であって、生きている貝の全うな姿ではない。同じようなジレンマがあ る。たとえばシダ植物は知っていても、その初期に現れる前葉体を見た者はほ とんどいない。つまり自然のいのちの全体像が捉えられていない。

森林生態学の研究で三重大学の実習林や春日山の原生林の調査をした。ここで私は、森は単に木の集まりではなく、その素晴らしさは一本一本の木が森であるということを直観的に実感した。科学でも宗教でも自然界のあるがままの姿を捉えようとするが、それはトレーニングを積んで可能となる。普通にバラバラで見ていたのでは、真にありのままの木の姿は見えてこない。自然復元においても、自然をありのままに映す内なる自然を持たなければ、健全な外なる自然を持続させていくことができないであろう。その典型が社寺林である。森は尊い神として昔から人々によって直観的に崇められ畏敬される存在であった。このように森を神として祀る本来の考え方が現代では忘れがちになって、立派な社殿づくりに力を入れたり、神域の森が単なる水保全林のように考えられて

いる。森は神であり神とは森であるという見方が重要なのであり、それを何百年も守りつづけてきた人の心が、まさに内なる自然である。ところがこのような人の心が崩壊すると、回互転換して外なる自然である森は荒廃する。昔の人々は、この働きを神と捉えて大事にし、それが日本人の自然観の根底にあるものである。このことを再確認し再認識することでその価値を発見して、科学に偏している現在の理科教育も見直さねばならないと考えている。

実際にこのような考え方をさせるよい実践例として、子どもの自然学習の例を示そう。たとえば子どもがドングリを拾っても、そのことだけで木に花が咲いてから一年を通して観察することがない。そこで毎月観察させることにしたがこの時、毎回観察事項と併せて「詩」も書くように指導した。そのことによって子どものもつ主観と客観つまり感性と理性が子どもの中で回互転換して、内なる自然と外なる自然が一如となって総合的に自然を捉えることができるというのが狙いである。

外なる自然と内なる自然をつなぐ行動の仕方について、正法眼蔵の中に「経 巻は盡立十方界これなり、経巻にあらざる時処なし」と書かれている。つまり 自然のすべてがお経であり、自然はそれぞれの自然の文字で書かれている。た とえば虫のことは虫の言葉で、草のことは草の言葉で書かれている。それを私 自身のいのちという文字として読み取ることによって、自然の元になるものが 分かってくる。それは日本の言葉では、自己の「みづから」と自然の「おのづ と」を重ね合わせて「おのづから」という言い方をする自然が営む力である。 外の世界と内の世界とが一つに働いて相互補完することで、すべてのいのちが 働く。道元はそのことを「全機現」と表現している。それを誌人の高村光太郎 は、「牛」と題した詩に歌っている。・・・

つまり牛が自然を見るのは牛自身を見ていることであり、外を見ると一緒に 内が見え、内を見ると一緒に外も見える。このように内と外を仕切らない見方 が日本人の持つ自然観であり、そこからこれからの科学や社会の方向性や、自 然復元の方向性が価値あるものとして見えてくる。

大阪万博公園自然文化園の森の再生にかかわって、人工の森はそう簡単に自然に戻らないことを経験した。人が造った幾つかの森の中でも、明治神宮の森は長いスパンで自然の遷移も考慮して造成されているので、よく再生している例である。それは内と外の存在つまり人と森を分けて考えずに、つまり回互転換する一つのものとして「あらしめられている」という考え方からであり、そこからあるがままの姿が見えてくる。講演要旨集の7ページの図で、上段は科学によって人と木が分別されているが、下段ではそれが無くなって相通じる存在として一体化している。芸術や宗教、哲学にはこの世界がある。こういう考え方の流れは自然観察においても大切であると考えて、"美しい心を育む自然観



察"という本を出版した。そこに四つの視点すなわち不思議の目、科学の知、感動の心、いのちの学びを挙げたが、これが日本的自然観の根底にあるものである。そしてこれを生かすにはどうすればよいか。この本の共著者である後藤紗貴さんが会場にいるので、その一部を読んでもらう。(註3)要するに自然観察は物知りだけに終わらな

いで、自然と共に生きる生き方自然体を変えることである。それが変わると世 界観も変わって暮らし方が変わる。

こういう考え方に直結するような自己改革を伴う理科教育を進めなければならないということである。

最近、大阪市の御堂筋のイチョウ並木606本のすべてに、1本あたり300個の電飾が付けられてギネスブックに載った。このような電飾による夜の景観づくりは他都市でも例があるが、その街路樹をよく見ると、毎年装着しているためにコードが枝に食い込んでいる。しかも光がよく見えるように細枝まで剪定されていた。自然の美しさと言うものを、夜景の綺麗さにこだわる都会育ちの感覚では本当の自然の美しさが見えてこない。自然環境を復元するその奥にある内なる自然を、如何に外の自然と区別しないか、自己と自然が回互転換していることを考えなければならない。しかも私のあり方が一人から何百人へと拡がるためには、一人一人の内なる自然を健全なものにすることを図らねば、外なる自然は健全に持続されないであろう。それが私の自然復元に対する提案である。

#### 註3:あとがきの一部

学ぶ姿勢が身に付くと、物の見方や考え方が大きく変化してきます。ものの 見方や考え方が深まると、今までの世界が変わり、さらには自己の生き方も 変わるのです。学ぶということは、ただ知識を覚えるだけではなく、生きる ために知識という道具を、どのように扱うのかを考えることです。私は、自 然観察から自然体という生き方を学ぶことが、一番大切であると思います。 なぜなら、自然はいつもあるがままの姿で素直に生きているからです。本書 を通して、自然との出会いに感謝し、一人でも多くの人が美しい心をもって くれることを願います。

# 質疑応答



コーデイネーター 村上宣雄

(自然環境復元協会理事 龍谷大学非常勤講師)

#### Q1「山これ山というにあらず、山これ山なり」を分かりやすく説明して下さい。

A 菅井先生(以下敬称略)山は地形の一つ。道元の言う山は、「いのちとしての山」のこと。一般に人々は単なる山と見ているのであって、本物の山を見ていない。例えばアリを見ていると言っても、いのちのアリを見ていない。 アリのいのちを見る目でアリを見つめた日本画家は、アリは左足の2番目から動き出すことを見出した。

# Q2 金融・資本主義の成熟ではなく、交替を目指すべき成熟とはどんな社会で すか。

A 中村先生(以下敬称略)生きものは続いていく中で成熟するが、経済中心の現代社会は、成熟ではなく成長を求めている。そこで生きものの視点を入れて成熟を求める。

#### Q3「未来につなげる」とはどんな社会ですか。

A 中村 「未来につなげる」ではなく「未来につながる」と考えている。生き ものは38億年生きてきたが、先はなるようになるということしか分からない。 予測は不能である。しかしいのちは、つながっていくものである

#### Q4「生きるということで世界観を考える」ことについて学問ではどのジャンル

#### になりますか。

A 中村 これまでの生命科学では、生きものは分からないと思う。生きものの研究には哲学や宗教も必要であるが、私は科学を基本に考えたいと10年間悩んだ末に、生命誌を考え出した。生命誌研究館での活動に一応納得している。

Q5「重ね描き」する科学の方法に感銘しました。今後このような社会を築くに は、どんな策を講ずる必要がありますか。

A 中村 多くの方が分かりやすいと言って下さる。生きている実感だと思う。

#### Q6 科学と日常生活の重ね描きを、教育界に広めていくことは可能ですか。

A 中村 生命誌研究館はコンサートホールのようなもの。楽譜は素人には分からなくても、一流の演奏家の演奏による音楽はよく分かって楽しむことができる。科学論文も一般の人には分からないが、生命誌研究館では専門家による表現をしているので、関心のある人に来ていただけば、皆さんに分かっていただけると思う。

#### Q7「内なる自然」を身につける学問はあるのですか。

A 菅井 必要はあるが、現在きちんとしたものは無いと思う。感性や情緒を 育てる分野としては、音楽や美術がある。

A 中村 小学校学習指導要領理科編(文科省)にある理科の目的6項目のうち、その第1に「自然に親しむこと」とあり、つぎに「自然を愛する心情を育てること」と書かれている。この2項目は考えてみれば科学の目的ではない。つまり明治時代からの日本の科学は純粋の科学ではなかった。生命誌の観点からは、これは素晴らしいことである。重ね描きや内なる自然につながる教育である。

A 菅井 日本の理科教育はうまくできていて、西洋のような客観性に徹したサイエンスとは異なる日本的自然観を、その中に取り込んできた。今でも小学校3年生では、自然観察があってこの場でこうした学習ができる。

A 中村 みんな、理科教育の目的にこのような項目のあることに気づいていない。もっとこの事実を生かしていく必要がある。

Q8 内なる自然に関する学習に道徳がある。私は道徳の項目の中の「自然や崇高なものに対する」という学習の時に、自然を教材として展開している。(フロアからの意見)

A 菅井 このことについて大きな問題点がある。道徳で崇高なことについて指導する場合、肝心の指導する現場の教師が、上っ面だけでよく分かっていない

場合が多いため、その内容が深まり難いという悩みがある。これでは形だけの 学習になってしまう。

A 中村 内なる自然に関する学習は、かならずしも理科という特定の教科の中で進める必要はなく、科目を超えてすべてに通ずるものである。例えば4年生の国語で「体を守る仕組み」(免疫)を、6年生では「生きものはつながりの中に」というテーマで生命誌を語っている。子どもたちから毎年600人ほど手紙が来るが、都会の子どもたちからの便りがない。(笑い)

#### Q9「働きに対して神と呼んできた」との話があったが、事例があるのですか。

A 菅井 田んぼには田の神、山には山の神、海には海の神のように、八百万の神がいるという考えが昔からある。日本ではあらゆるものを、いのちの尊厳として捉えてきた。今の学校教育の中にも、このことを知らしめていく必要があると思う。強制的ではないが、このような学びの場を作ることが必要である。

#### Q10 この先、私たちは何から行動すればよいですか。日常生活の中で、どんな 目標を持てばよいでしょうか。

A 菅井 今日の議論から自分の足元の問題に目覚めて、地に足の着いたことから着実にやることです。働きへの深み、いのちを見る深みを大切にしよう。 ナメクジでもよく見ていると欠伸をする。

A 中村 常に生きものからアプローリして「生きものとは何か」を考える。 内発的に行動することが基本である。



# 参加者の意見や質問

- 1. 進歩より進化、成長より成熟、多様性といった主張は、市場主義にすでに取り込まれて利用されているのではないか。また内外一如の思想は科学の視点から見れば、精神主義と見なされてしまうのではないか。
- 2. 人間は生きもの、人間は自然の一部。の一部を削除する。「内なる自然」J-Jルソーnatureの一つの意味として考えているようですが、その同異は? 生き方の指導、道徳教育そのもの。以前ご著書の中で「生きものの中で人間だけ三世代の交流がある」に感動したが、今でもその説は? 自然(じねん、しぜん) 一如の自然はどちらか?
- 3. 生きものとしての自分(私)の生き方を、どう動けばよいのか考えるチャンスを与えていただいた。自然とかかわって生きている私の中には、学問のが抜け落ちているが、生命の一員です。私を含めた自然、自然とは何だろう。自然に生きているのに、今だに何が自然なのか、また自然体とはどういう事なのか、まだ解からない。でも自然人です。明治神宮の森は自然林でしょうか。人が造った、また造れる自然はあるのか。それは最大の破壊的存在であると思います。
- 4. 自然環境復元、自然再生と言う時、頭の中に描かん"自然環境""自然"とは・・・かっての農山村の風景を"自然"と誤認識しているのではないか。 科学を即自然生活の害なるもの(敵?)ととらえているような印象を受けたが、科学はものの見方(観方)の一つであり、自然環境復元、自然再生に邪魔になるものではない。あるがままの自然というのは、決して人にやさしいものではない!!
- 5. 自然観察と詩を一緒に表現させる課題は、素晴らしい試みだと思った。ぜ ひそうした教育を広げてほしい。
- 6.「内名なる自然」の概念は、自然を分析し観察する時には有効で本質的なお話と思う。では自然を復元するある自然を管理・運営していくという時に、「内なる自然」をどのように生かしていくべきか、考えを教えてほしい。
- 7. 漢字を読み取ること自体が、哲学にふれること。そんな想いを持った。しかし一如、女の口とは?面白い。

# アンケート結果報告

今回の参加者は会場一杯の約70名であったが、アンケートを提出していただいたのは28名であった。その結果は下記の通りある。

#### 「内なる自然」ミニシンクポジウムアンケート用紙

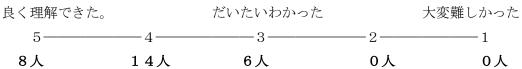
本日はご参加下さりありがとうございました。大変難しいシンーポジウムでありますが、極めて大切な内容と私たちは考えています。

下記のアンケートにお応え下さい。

1・今回のシンクポジウムに出席されて有意義でしたか。

大変良かった		普通		良くなかった
5 ———	4	3	2	<del>1</del>
23人	5人	0人	0人	0人
老窓 - 参加者ほど	んどが有音差が	で生全であったと名	<b>ぐ</b> ラていス	

2・お二人の先生のお話しは理解できましたか。



**考察**―お話しの内容は目に見えない高度な内容であり、初めてお話しを聞かれた方には難しい印象を持たれたと思われます。しかし講師の先生がパワーポイントや図を使ってわかりやすくお話し下さったので、皆さんが引きつけられる感じで拝聴されていました。

3・「内なる自然」に関心をお持ちですか。

大変ある		普通	普通		
5 ———	4	3	2	<del></del> 1	
19人	9人	0人	0人	0人	

**考察**-アンケートでは、全員が「関心がある」と答えており、この問題に引き続いて関わっていきたいと考えている人が多いことがわかる。多くの人がしっかりとした考えを持って自然に対峙したいと考えているのがうかがえる。

4・結局あなたは本日のシンポジウムに参加されて「内なる自然」をどのようにとらまえられましたか。自由に書いて下さい。疑問点でも質問でも何でも結構です。

この内容については、次のベージにまとめています。

#### ■「内なる自然」に言及した感想

- ①・内なる自然と人とはどのようにつながるか想像できなかったが、講演を聞いて、いかに自然が重要でなお、それを観察することにより、人間が豊かになることを知った。
- ②・講師の専門的立場から見た内なる自然の話は理解できた。現在の日本(世界)に於いては、もう少し"心"・精神のいやしと、自然(生物)とが結びついていくことが大切ではなかろうか。
- ③ネイチャー、自然, じねん、内なる、を論じるのは難しい。内・外の関係を考えることがよい。
- ④・自然は内も外もなく、同じ自然だということがわかった。
- ⑤内なる自然は、外なる自然と分けられるものであり、分けられないもの。自然の半分であり全てである。
- ⑥人はヒト、生きものであり自然の一員であることから、自然と文明の関わりを大切に してゆくことの方が、私たちの内なる自然の立ち位置であり、未来の人々への責任で あろう。日本国土には生命の基本となる雨水が豊かにあって、土地をうるおしている。 このような生命にとり有利な環境では、他に比べて自然再生の効果を得やすいと思う。

#### ■「科学」との関係に言及した感想

- ①自然はひとつ。人間(ヒト)は自然の一部にすぎない。人間が科学の進歩を理由に、 自然を破壊していることに気づかなければならない。
- ②見えない"心"の動きをとらえることは難しいが、「内なる自然」も科学の目と心でとらえている自分がいる。科学と言うものが入ってくる前の日本を見てみたい。
- ③自ら行動できるようになることが大切である。中村先生の科学だけでは不十分だとい うことに賛同できた。

#### ■「生き方」に言及した感想

- ①日常のごく身近なことから"生きている"を見つめ"生きる"を考えたい。たとえば自分が祖父母・両親から受け継いだことを子孫に継承する中に、何らかのことが見出せるかもしれない。
- ②自分の身近なものをしっかりと見て感じて、出来ることをしていくことが大切だ。 自分の日々を振り返ることの大切さを改めて感じた。日本人の自然に対する感じ方、 先人が守ってきたことを大切にしなければならない。
- ③自身の生き方(様)に目を向けることで、現実の社会を学ぶ。今後も日頃の市民生活 に関わる中での自分らしさのあり方を考えてゆきたい。
- ④ありのままの自分で生きていき、それぞれの違いを認め合い、尊重しあって生きていくことが大切であると感じた。

- ⑤自然の大切さ、生きる力の大切さを学べた。
- ⑥自分の生き方を、これを機会に立ち止まって考えてみたいと思う。
- ⑦地球環境の保全が重要なわけだが、内なる自然の考え(まだ理解できていないが)を もとに今後、地球環境保全を実際に進めていくには、どのような方法が効果的だろう か。
- ⑧ J T生命誌研究館は、過去2回訪れたことがある。当時は大変難しいものと思っていたが、年を重ねる毎に生命あるもの、実に自然そのものを考え、人も一体となって生きる、を知る星である。
- ⑨愛づる、回互転換、この言葉に感じてこれから生きる。
- ⑩退職と共に自由時間が増えるので、残りの時間を如何に生きるべきかを考えるとき、「自然」と「心」という二つのテーマを持って生きることを考えて、自然観察や森林 ボランテイアをしてきたが、「心」については、日常生活においてどこまで実践出来 ているかと反省する。本日の話を聞き、生きる力をもっとつけねばと思っている。

#### ■「世界観」「自然観」に言及した感想

- ①世界観、体験に基づく自然観は、ただの都会的な(西洋的な?) エコロジー思想でなく、根源的な自然を見る目のこと。センス・オブ・ワンダー
- ②世界観の視点で物(事象)の見方を、少し視野を広く持たなければと再認識した。
- ③目に見える、触れる、聴くといった事を通して概念化する自然とは、その通りだと思う。広く人間性を映した自然観というものではなかろうか。意義深い新たなるステージになっていくのかなという感じがする。

#### ■運営に関する感想

- ①素晴らしい機会を与えていただき感謝する。ただ、当然主催者側のメッセージもあってよいかと思うが、その時間が長いように思えたし、二人の講師の主張をまとめられるような説明は不適切かと思う。そのように時間をとるのなら、「自然環境復元協会」の方の主張を講話(講演三)として設定してもらった方がよいかと思う。あらためて「自然環境復元協会」の方の話も聞きたかった。
  - (\*) 事務局から一協会内でも現在学習中です。近い将来協会としてのメッセージが公表できればと考えています。

#### ■その他

- ①参加者に教育関係者が多かったのは意外だった。
- ②正しい理解を学校で教えてほしい。経済ばかり言う人にもっと勉強してほしいと思った。自然をいままで大切と思っていたが、理論的に説明でき目の前が明るくなったような思いがする。



「内なる自然」の提唱者である故杉山惠一氏の奥様(杉山美智子さん)が、その 思いをお話になりました。

# あとがき

現在、社会のあらゆる分野において、価値観が見直されるタイミングに来ています。今回行われたシンポジウムもまた、開催規模こそこぢんまりとしていましたが、その大前提は何ら変わらないという考えで企画しました。当初は、25年前に経済成長に伴って破壊された環境の復元が目的でスタートした社会活動を、今の時代に即して如何にリセットするかというところから発想しました。ところがその活動の主体とは、環境とは何かを考えるうちに、それは「人とは何か」「自然とは何か」という、最も原初的な課題を問い直すことに他ならないことに気づきました。幸いにこのことに関して講師の先生方のご理解を得るとともに、身近な人たち(任意団体)とも思いを共有することができて、このシンポジウムが実現しました。賽(さい)は投げられた今、現在そして未来社会の多くの人たちと、共に生きるための門出にしたいと思います。

最後になりましたが、このシンポジウムのキーワードとなった「内なる自然」を提唱された、故杉山惠一先生ご夫人の杉山美智子様が静岡からお越しくださって、ご挨拶を賜りました。古今東西を超えた人の絆も大事にしながら、この活動の益々の発展を願っています。

あかお せいし (自然環境復元協会元理事)

# 「内なる自然ミニシンポジウム」実行委員一覧表

役 職	氏 名	所 属	備考
代表	村上宣雄	NPO法人自然環境復元協会理事	環境再生医
		龍谷大学非常勤講師	
事務局	赤尾整志	NPO法人自然環境復元協会	環境再生医
委員	小泉昭男	NPO法人自然環境復元協会	環境再生医
委員	石渡正志	子どもと自然学会副会長	
		甲南女子大学教授	
委員	木内 功	日本的自然観実践研究会	
委員	藤野耕一	NPO法人自然環境復元協会理事	
委員	高畑正	NPO法人自然環境復元協会理事	環境再生医
委員	菊地泰博	日本環境教育学会関西支部	環境再生医
委員	本庄 眞	日本環境教育学会関西支部支部長	環境再生医
委員	天野雅夫	日本環境教育学会関西支部	環境再生医
		親和女子大学非常勤講師	
委員	植田善太郎	日本環境教育学会関西支部	環境再生医
委員	森本誠一	大阪大学大学院文学研究科招へい研究員	
		大阪大学産学連携本部特任研究員	

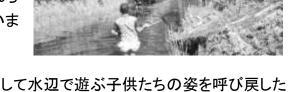
## 参考資料



# 自然環境復元協会とは

正しい知識とみんなの力で自然はよみがえる。私たちは自然を治すお医者さんです。

自然のなかで様々な生きものはバランスを 保ちながら共生しています。もちろん、これま で私たちの生活もその一部でした。 しかし、社会・環境の変化にともない、これら のバランスが大きく崩れ、失われ始めていま す。



コンクリートで固められた川を元の姿に戻して水辺で遊ぶ子供たちの姿を呼び戻したり、埋め立てられた池を復元しトンボの楽園を再生したり・・・

みんなで協力すれば自然はよみがえります。

さぁ、一緒にはじめませんか? みなさまの参加をお待ちしております。

#### 【目的】

私たちは、今日の環境危機を乗り越え、よき自然環境を後世へ引き継ぐため、生物 多様性および美しい景観の回復、ならびにそれらを維持保全する地域社会の人の 輪の醸成に向けて力を注ぎます。

#### 【方法】

わが国は長い歴史の中で、生物多様性に基づいた農業にその基盤をおいて発展を遂げ、また同時に美しい農村景観や文化的景観を維持してきました。それ故、今

日危機的状況におかれている農業・林業を再び活性化することは、自然再生の手段 として最も重要な課題であると考えます。

農にかかわる形態は多様ですが、農と自然、さらには森を愛する多くの人びとと連携し、作業にあたっていきます。またこの取り組みは、民・学・産・官の協働のもとで、合意を形成しながら推進します。

#### 【効果】

農山村は、さまざまな自然、里山や農的環境を維持しており、子どもや若者の成長に欠かすことができない多くの教育的、感性的要素を有しています。また、都市農村 交流を通じて人間性や健康を回復する場としても、無限の可能性を秘めています。

したがって今後、都市と農村の交流および都市から農山村への人口流動の円滑化を支援しながら、わが国が総体として農と生態系を基礎とした社会づくりへ向かうことを期待します。

#### 【官言】

このように豊かな可能性をもつ農山村が崩壊の危機にひんしている現状を、私たちは決して看過せず、自然環境の復元と再生への道を目指し、地域住民とともに歩むことを、ここに宣言します。

2009年5月16日

特定非営利活動法人 自然環境復元協会

参考資料は自然復元協会のホームページより

認定NPO法人自然環境復元協会 〒169-0075 東京都新宿区高田馬場 1-3-13-301 TEL 03-5272-0254 FAX 03-5272-0278

■「内なる自然」ミニシンポジウム実行委員会

代 表 村上宣雄 (090-5062-2206) 滋賀県 事務局 赤尾整志 (090-5011-8975) 神戸市